

文部科学省委託「道徳教育の抜本的改善・充実に係る支援事業」
シンポジウム「道徳の教科化と道徳教育への期待」

本日は文部科学省委託の「道徳教育の抜本的改善・充実に係る支援事業」として「道徳の教科化と道徳教育への期待」と題するシンポジウムを開催するにあたり、このように多数のご熱心な参加者の皆様をお迎えできますことは、主催者側の麗澤大学として誠に有難く、心より感謝を申し上げます。

また、本シンポジウムを後援して下さった千葉県教育委員会、柏市教育委員会、千葉県 PTA 連絡協議会、柏市 PTA 連絡協議会の関係者の皆様方にも、心から御礼申し上げます。

さて、皆様もご存知のように、小学校では 2018 年度から中学校では 2019 年度から特別の教科としての道徳が始まります。世論調査によると、8 割以上の方が賛同しているようですが、その一方で、教育現場では戸惑いや問題提起もあると聞いています。

しかし、道徳教育に非常に熱心であった先生方を除き、これまでの道徳教育は、質、量ともに決して満足のいく教科ではなかったという事実は否めません。教科化によって道徳教育が新たに改善され、大きく飛躍し、やっと本格的な道徳教育の時代が来たと期待を寄せています。

もちろん教科化だけで全てが解決するわけではありません。私たちの直面する問題を解決し、学校での道徳教育を前進させるため、少しでもお役に立てればと思い、本シンポジウムを開催いたしました。

しかし、本来、道徳は教科であるか否かに係らず、私たちのよりよき人生を送るために不可欠なものではないでしょうか。道徳とは他者とのより良き関係性の構築です。私たちの児童・生徒、子どもたちが幸福な人生を送るために、どのような心遣いで、どのような行いをするべきかを示す羅針盤であるべきだと考えております。

新しい特別の教科としての道徳が目指すのは、単なる認知的な能力だけではなくて、21 世紀のグローバル時代に必要とされる汎用的能力、あるいは、経済産業省の提唱する社会人基礎力のコアになるべき能力の養成です。たとえば、社会人基礎力の「失敗しても一歩前に踏み出す力」、「チームワークで働く力」は、まさに道徳教育が育成すべき 21 世紀型の能力です。それはまた、子どもたちが社会に出てよりよき他者との関係性を築き、幸せな人生を送るための道徳的人間学の基礎になるものだと考えております。

自分と他者との関係を考えながらどのように生きるかを学ぶことは、ある一定の時期に限定されるものではありません。小学生には小学生、中学生には中学生の関係性があります。そうした関係性は、環境や年齢が変わるごとに新しく組み替えられ、それに対応する新しい道徳的な心構えや態度が要求されるため、道徳の学びは生涯学び続けるものと考え

ます。

このような広い視野で考えると子どもたちが社会性を学ぶ人生のスタート地点の学校教育で道徳を学ぶ時間をもつことはとても大きな意味があります。

また、道徳を担当することで教師自身の人格が向上し、その教師をロールモデルとする子どもたちの人格も向上するわけですから、これほど教師としてやりがいのある科目はないでしょう。

麗澤大学ではアメリカのボストン大学、ミズーリ大学、イギリスのバーミンガム大学と学術交流協定を結び、道徳教育が学生・生徒に与えるインパクトの測定法について共同研究しています。アメリカでは人格教育の大切さを再発見し、100を超える高等教育機関で倫理・道徳の研究がなされ、21世紀の新しい知の再構築を目指しています。またイギリスでも与野党、王室までもが道徳教育を支持して、政策の一部に組みこまれています。

しかし、日本では、残念ながら道徳教育の学問的研究を積極的にかつ専門的に進めている大学は少ないといわざるをえません。そこで麗澤大学では、専門研究者の養成が最も必要だと考え、道徳教育の大学院、学校教育研究科道徳教育専攻の修士課程を平成30年4月に開設するべく構想しております。今日、この場をお借りして、皆様のご理解とご支援をお願いしたいと存じます。

新しい学習指導要領では、物事を広い視野から多角的、多面的に考えることを道徳教育の目的としています。本日のシンポジウムもこのあとの基調講演、ワークショップ、パネルディスカッションが多面的、多角的な視点から道徳教育について考えるようデザインされていますので、ぜひ楽しんでいただけたらと思っています。

皆様方のご協力に感謝し、開会挨拶に代えさせていただきます。